

2006.11.14

赤ちゃんの力で

子どもが変わる

上

児童・生徒が一歳未満の赤ちゃんといふ体験学習が、県内で広がりを見せている。湯梨浜町や境港市のほか、倉吉市のNPO法人未来（岸田寛昭理事長）では県教委の委託を受け、二〇〇六年から三カ年計画で県内の小中学校、高校で取り組んでいる。子どもの役立ち感の醸成や子育て中の母親の悩み軽減にもつながると期待が寄せられている「赤ちゃんといふ体験」。その成果と今後の課題を追った。

（中部本社・八幡祥代）

ふれあい体験

赤ちゃんといふ体験は、児童、生徒たちがまずコミュニケーションの大切さについて学習。その後、赤ちゃんとその親と対面し、赤ちゃんを抱いたり、親に子育てについての質問などをする。

最初は緊張ぎみの児童、生徒たちも赤ちゃんといふ体験が進んで

いくつち、次第に表情 ったけど、お母さんに えるようになり、人間 と呼ぶ。 が穏やかになってく ころまで大きくして 関係の基礎を学ばせて くれてありがとと思っ くれる」と語るのは鳥 取大学医学部の高塚人 志准教授。

授業を体験した羽合

た」と話す。

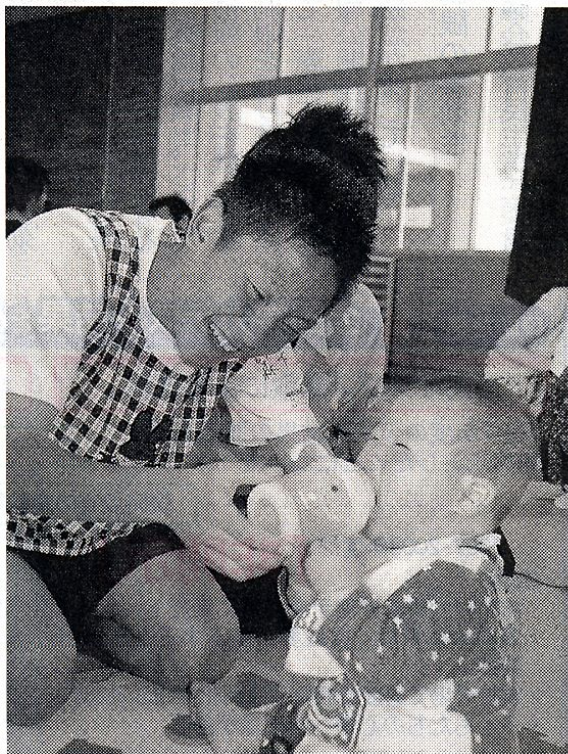
小五年の和田薫乃さん

「赤ちゃんは、子ど

志准教授。

「赤ちゃんは、子どもたちの心を癒やし、温かくしてくれる。そさせてくれる赤ちゃんの「魔法の力」を高塚准教授は「赤ちゃん力」まで考えたことがなか

芽生え、命の尊さを考 高年齢者の施設を訪問 し、継続的に交流を持つ 授業だった。 生徒たちは、幼児や 高年齢者とのふれあいを 通して相手に喜ばれる という「役立ち感」を 感じ、他者と積極的にかかわりを持つようになっ ていったという。



赤ちゃんをあやす中学生 = 5月、倉吉市の東中学校

母親にも一役

この体験学習を発展

させ、子育て中のお母さんに赤ちゃんと一緒に学校に向いてもらうようになったのが、今のスタイルだ。 赤ちゃんといふ児童、生徒とのふれあい体験は「お母さんの子育てにも役立つ」と高塚准教授は指摘する。実際、 何度もふれあい会に参加するようになる母親は多いという。 約十回、会に参加しているという湯梨浜町別所の会社員、千熊優子さん（三十四）は「子どもたちを笑顔にする力を与えられるのが赤ちゃんだと感じる」とほほ笑む。わが子が子どもに喜んで受け入れられるのは、母親にはうれしい体験であり、子育ての楽しさも確認できるといふのだ。 さらに、「月齢が同じような赤ちゃんのお母さん同士で、悩みなども相談できる」と話している。

笑顔生む魔法の力

生徒たち「役立ち感」を体験

せいじょう

読みたい

せいじょう

気付く

せいじょう

あきらむ